

ラスキンとマルクス：「科学的エコロジー（経済）」と「ロマン派のエコロジー（自然）」との統合

IIOKA, Hideo / 飯岡, 秀夫

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

経済志林 / 経済志林

(巻 / Volume)

73

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

117

(終了ページ / End Page)

170

(発行年 / Year)

2006-03-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004377>

ラスキンとマルクス

—「科学的エコロジー(経済)」と「ロマン派のエコロジー(自然)」との統合—

飯 岡 秀 夫

目 次

序. 問題の所在

—本稿の焦点・テーマ・目標—

1. 近代文明の「悲劇」とその元凶
2. 「魔術からの解放」→「啓蒙思想」→「人間中心主義」思想の問題点
—中心の転換と再転換—
3. 「エコロジー」の二つの潮流
4. ラスキンのマルクス
5. 本稿の焦点・テーマ・目標

第1章 「科学的エコロジー」と「ロマン派のエコロジー」

第2章 ラスキンのマルクスの「ブルジョア文化」批判

第3章 ラスキンの「経済」と「自然」との統合

—「自己実現」(「生の増進」→「人間的完成」)の論理—

1. 「固有価値 (intrinsic Value)」
—新しい「富」概念の創造—
2. 「経済 (学)」の目標
—「生の増進」→「勇敢人 (VALIANT)」→「真の富の実現」—
3. 「自然」と「人間」と「生産物」との「共創的相関関係」による
「相互固有価値」の実現
—「経済」と「自然」との統合による人間的完成の論理—

第4章 マルクスに於る「経済」と「自然」との統合

—「自己実現」(「人間の人間化」)の論理—

1. 広狭二義の経済学
2. 「自然」と「人間」との「物質代謝」
—「地球生命系の経済学」の土台—
3. 「自然」と「人間」との「共創的相関関係」による「相互本質諸力」の実現
—「人間の人間化」の論理
4. 「経済」と「自然」との統合による人間の自己実現

結び、「固有価値(ロマン派のエコロジー)」と「本質諸力(科学的エコロジー)」との統合

序．問題の所在

——本稿の焦点・テーマ・目標——

1. 近代文明の「悲劇」とその元凶

近代文明は今や「悲劇」の舞台と化している。人間と自然（環境）との汚染・破壊という「悲劇」である。「人間性」のみならず、「人間存在そのもの」が危機にさらされているという「悲劇」である。

この「悲劇」の元凶は何か。

地球的空間と資源と再生能力の無限性を前提として、「利潤と効用と成長とを至上目的として追求してきた⁽¹⁾」カウボーイ型経済と、科学技術をもって自然を支配・搾取し、放縦かつ無制限に、「生産、生殖、消費、成長etc」を追求してきた生活様式こそ、その「悲劇」の元凶だ。現代のインテリジェンスはかく教える⁽²⁾。

しかし、近代文明の「悲劇」はひとりその土台をなす「経済」とそれを中心とした我々現代人の「生活様式」だけの問題ではない。

ここに「悲劇」からの人間と自然（環境）の救済を志向する「エコロジー」が登場する。「エコロジー」が「悲劇」の元凶として究極的に糾弾するのは近代文明の原点——「魔術からの解放」⇒「啓蒙思想」⇒「人間中心主義」思想——そのものである。

2. 「魔術からの解放」⇒「啓蒙思想」⇒「人間中心主義」思想の問題点 ——中心の転換と再転換——

近代文明以前にあっては、東洋に於ても西洋に於ても、世界は「有機体」——生命に溢れ盡的な力を本有する統一体——としてとらえられ、そこに於る知的営為（学問）は自然現象や生命現象の根底にある「有機体」の意味と目的をさぐり、そこから人間の歩むべき道（倫理）をつかみとる

ことに向けられていた。つまり、近代文明以前にあっては、中心は「人間」の側にはなく、「魔術の園」としてのエコロジカルな「ガイア（有機体）」の側にあった。

「魔術からの解放」→「啓蒙思想」を源流とする「近代」という時代はその中心の転換——「ガイア（有機体）」中心から「人間」中心へ——をもって時代的エポックを画した。

以下、近代文明に特有の「人間中心的世界観」の成立・特徴・問題点のあらすじを論じ、もって「エコロジー」の課題がどこにあるかみておくことにしよう。

ルネッサンスと宗教改革を通じて、「学問」と「宗教」という両輪のもとに押しすすめられてきた現世の「魔術からの解放⁽³⁾」は「魔術的なもの」あるいは「霊的な作用因」のいっさいを「自然界」——山や森林や川といった物質的自然はいうまでもなく植物や動物といった生命的自然に至るまで——から奪い去り、それを「造物主」あるいは人間の精神（スピリット）の側に帰属せしめた。生命に溢れ霊的な力を本有する統一体としての「自然（森羅万象）」は今や「造物主」や「人間」という運動因によってひきおこされた運動を、ただ受動的に伝えるだけの、機械的存在になりさがってしまったのである。

ここに、「科学的世界観」と共に、「人間中心主義的な思想」が近代文明の土台として根を下ろすことになる。ユダヤ・キリスト教に本来的に固有の、「被造物」世界に於る「人間中心主義的な思想」が、科学的理性によって裏うちされたのである。

「啓蒙思想」は「魔術からの解放」→「科学的世界観」を土台として成立した、近代を貫く思想である。それが理性・科学を重視し、福祉の増進と智徳の完成→人間の自立という人類の進歩をめざしそれを信じた限りでは否定さるべきものは何もない。「啓蒙」の問題点は、それが人間を越えるもの——「エコロジカルな天地宇宙の共創的相関関係⁽⁴⁾」あるいは「超越者」——を見失い、人間のみをしかもその理性的な側面のみを「天地宇

宙」の原点にすえてしまった結果、「啓蒙」の究極の目的である「人間の自立」ということが達せられていないところにある。

宗教改革期にあっては人間ははまだ「超越者」の下にあった。自然界の運行の第2の運動因としての人間の、その心の宿る「内なる光」には、「理性の光」のみならず自然理性とは区別された「霊的な光」もまた共働し、それが「超越者」と「人間」とをつないでいた。しかし18世紀のフランス「啓蒙主義」の時代になって「理神論」がはっきりと姿を現わし、さらに、「理神論」が「無神論」に変質していくに従い、「超越者」に直結する「霊的な光」は力を失い、「理性の光」のみが「啓蒙」の主座につくことになった。唯一「理性の光」のみが人間に幸福と完成をもたらすと。

「啓蒙」の時代に固有の現世中心思想はここから始まる。そこにあるのは「経済財」による人間の生存と便利で快適な生活——つまり「効用」の増大——が無条件に肯定される。「機械論的な自然」は科学の対象としてのみみなされ、単にフィジカルな存在にとどまる下級の被造物は人間の所有物として人間の自由裁量権の下におかれる。その帰結が人間の欲望充足のための、科学技術を使つての、人間の自然支配・搾取の無条件の肯定である。ここに近代文明を特徴づけるヒューマニズム、「超越者」を忘れた「人間中心思想」が完成したのである。

ここであらためて問い直してみることにしよう。近代文明ははたして「啓蒙」のめざす、人類の進歩発展に貢献しているであろうかと。

その間に現代のインテリジェンスは「否」と答える。我々の時代的「悲劇」の現状がその理由である。

しかし「否」の理由は、ただ単にそれだけにあるのではない。「啓蒙」の究極にめざすところは、人類の自己実現としての、「内なる光（良心）」にもとづく人間の自律的自立にあったはずである。しかし、今や、啓蒙が究極にめざしたはずの、人類の自己実現としての人間の自律的自立は達成されていないどころか、かえって逆に、現代人は放縦と享樂のなかで自分を見失ってしまっている。自然を支配し搾取しながら。現代のインテリジ

エンスが我々の時代を否定としてとらえる究極の理由はそこにある。

我々の時代的「悲劇」からの人間と自然（環境）の救済、なかんづく、「啓蒙」が究極にめざした個と類の自律的自立という人間的完成。この課題にこたえるべく登場したのが「エコロジー」である。

「エコロジー」は再び中心の転換を要求する。「人間中心（的世界観）」からの『『生命の網の目』を中核とするガイア中心（の世界観）」への中心の転換である。その転換の原点に、人間の類的な自己実現としての自律的自立が立つ。マルクスとラスキンのエコロジカルな思想がめざしたのも、人間の類的な自己実現としての人間的完成である。我々はそのことを見落してはならない。

3. 「エコロジー」の二つの潮流

近代文明の「悲劇」からの「自然」と「人間」の救済と人間の自己実現——自律的自立——をめざす「エコロジー」の思想・運動には二つの潮流がある。「科学のエコロジー」と「ロマン派のエコロジー」の潮流である。

「科学のエコロジー」の潮流は、ルソー→マルスクを源流とし⁽⁵⁾、ポドリンスキー、ザッヒャー、クラウジウス、フォンドラー、アダムス、ソディなかんづくボグダーノフ、プハーリンらいわゆるマルクス主義的エコロジー派を経て⁽⁶⁾、ボールディング、玉野井芳郎らに受け継がれ、さらに、『ガイアの科学・地球生命圏』のラヴロックに至る潮流である。

「ロマン派のエコロジー」の潮流はルソー⇒ワーズワースらを源流⁽⁷⁾とし、ラスキン・モリス⁽⁸⁾、エマソン・ソロー・ミュアアらに継承され⁽⁹⁾、さらに、「土地の倫理」のレオポルドらを経て「ディープエコロジー」のネス、「樹木の当事者適格」のストーンらに至る潮流である。

両潮流は「エコロジー」という原点——「人間中心主義」から『『生命の網の目』を核とする『ガイア』中心主義』への転換——では共通するが、次の2点できわだった対照性を示している。①前者が主として「経済のあり方」の問題に焦点をあて、経済学の系譜のなかで新しい経済学の構

築をめざしているのに対し、後者は主として「自然と人間との交流」の問題に焦点をあて、自然（環境）保護思想の系譜を形成している。②問題解決の方策については、前者が科学技術に依拠するところ大なるに対して後者は新しい「倫理」——理念・目標——の設定と実現に求めている。

しかし、両者を決定的に分つのは次の1点にある。つまりそれは、前者が「科学的世界観」に立って、「自然」を機械論的にとらえ、科学的事実として、「ガイア」のエコロジカルな「共生」関係を論じているのに対し、後者は「ガイア」に内在する「神秘（霊）的力」を感受し、魂の次元で呼応しあうものとして、「ガイア」のエコロジカルな「共生」関係を論じている点である。

このような対照と対立をなす、二つの「エコロジー」の潮流の統合は——端的にいえば、「経済（科学のエコロジー）」と「自然（ロマン派のエコロジー）」の統合——はいかにして可能であろうか。この可能性を示すことが本稿のめざすところである。

とはいえ、この二つの潮流の統合は、それぞれのエコロジストたちによって、たとえば、ラヴロックやネスやマーチャントらによって、それぞれをどちらかの潮流に帰属せしめることを不可能にするくらいに深くなされている⁽¹⁰⁾。そもそも「経済」と「自然」との統合は、両潮流の源流をなす、マルクスやラスキンらによって、すでにその根本の試みはなされているのである。本稿は、両者のその根本の試みを詳論することになるであろう。

4. ラスキンのマルクス

マルクス（1818～1883）とラスキン（1819～1900）とは、資本主義と産業革命の暗い側面が出現した同じ時代を生き、共に同じロンドンの空の下で生活し、共に「ヴィクトリア体制」というブルジョア文化の下での「人間の悲惨」を批判し、そこからの人間の救済と、さらに、人間の自己実現をつうじての人的完成を志向した思想家である。本論で詳論するように、

両思想家の思想の間には極めて類似するところ大であるとはいえ、その後の両思想家の思想は全く別の運命をたどることになってしまった。ラスキンが「生産（階級）関係の矛盾」を見落していたわけではない。またマルクスが「人間と自然とのエコロジカルな関係」を見落していたわけではない。それにもかかわらず、モリスの努力と挫折が端的に示しているように、両者の思想は統合されることはなく、しかも、ラスキンらの思想はロマン派のイデオロギー——「自然への逃避の思想」——として、マルクス・レーニン主義思想体系の片隅に——否定的ひき出しの中に、——おしこめられてしまっていた。「人間の救済」の問題はひとり生産関係・社会体制にありとされた時代が長期にわたってつづいたのだ。

両思想が再び接近し、統合されることを要求しはじめたのは「環境問題」の出現がきっかけであり、決定的であったのは、ベルリンの壁の崩壊である。今や時代は階級問題だけでなく、それを越えて生産力——人間の科学技術を使つての「自然支配」——の問題が問題とされるようになり、それと共に、時代が「赤（経済）」と「緑（自然）」の統合を要求するようになったのである。

本論で詳論するように、マルクスとラスキンとは共に「エコロジー」——「自然」と「人間」との「共創的相関関係」——の問題をベースとして、近代文明の「悲劇」からの「自然」の救済と「人間」の救済⇒自己実現を志向した思想家である。つまり両者は「エコロジー」をベースとした「自己実現」をめざした思想家である。「エコロジー」をベースとした「自己実現」ということを原点にすえるかぎり、ラスキンの「ロマン主義」的傾向——「自然保護の思想」——とマルクスの「科学主義」的傾向——「エコロジー経済学」——とは統合されるのである。

5. 本稿の焦点、テーマ、目標

本稿の焦点は「啓蒙」が究極にめざした、人間の個と類の自己実現としての、人間的完成——自律的自立——ということにあてられている。

ラスキンとマルクスとは近代という時代的「悲劇」をいかにとらえたか、そこからの人間の救済⇒人間の自己実現・自己完成をいかに考えていたか、これを論ずることが本稿の第一の中心テーマである。

本稿ではあわせて、近代人の自己実現・人間的完成のためには、「人間中心主義的思想」ではなく、ラスキンやマルクスが論じているように、人間を超えた、いわば、『自然』と『人間』とのエコロジカルな『共創的相関関係』中心主義的思想が必要であることが示されるであろう。

ここに「相互固有価値（ラスキン）」あるいは「相互本質諸力（マルクス）」という、「自然」と「人間」との「共創的相関関係」という本稿の第1のキーワードにつぐ、本稿の第2のキーワードが登場する⁽¹¹⁾。

人間と人間との「共創的相関関係」の下にあっては、人間と人間は、相互の共働のなかで、それぞれの人間が本有する「資質あるいは本来の面目」——「固有価値（ラスキン）」あるいは「本質諸力（マルクス）」——を融合・結合させて、その結晶たる「相互人間価値」——「相互固有価値（ラスキン）」あるいは「相互本質諸力（マルクス）」——を共創する。

しかしラスキンもマルクスも、人間と人間だけが「共創的相関関係」の下にあるとは考えない。人間を含めた自然の万物が「共創的相関関係」のもとにあると考えている。それら人間を含めた自然の万物が、「共創的相関関係」のもとに、相互共働のなかで、共創するのが「相互固有価値（ラスキン）」であり「相互本質諸力（マルクス）」である。

ラスキンとマルクスとは、共に、本論で詳論するように、人間の自己実現⇒人間的完成を、この人間を含めた自然の万物の——「自然」と「人間」との——「共創的相関関係」における「相互固有価値（ラスキン）」あるいは「相互本質諸力（マルクス）」の共創的実現との連関で論じている。両者は共に自然の万物との「共生」・「共働」のなかで、はじめて、人間の自己実現・人間的完成は可能であるとみているのである。

そればかりではない。ラスキンとマルクスとは共に、人間を含めた自然の万物の「共創的相関関係」に於て共創される、「相互固有価値（ラスキ

ン)あるいは「相互本質諸力 (マルクス)」のなかに、「経済」と「自然」との統合をみ、その上に築かれる「自然」と「人間」との調和した社会を志向しているのである。

ラスキンとマルクスとは「自然」と「人間」との「共創的相関関係」に於る「相互固有価値 (ラスキン)」あるいは「相互本質諸力 (マルクス)」の実現→「経済」と「自然」との統合をいかに論じているか、これを論ずることが本稿の第二のテーマである。

本稿のめざすところは「科学のエコロジー」と「ロマン派のエコロジー」の源流に位置するマルクスとラスキンとが、それぞれ、「経済」と「自然」との統合をいかに論じていたかを論ずることによって、「エコロジー」の二つの潮流——「科学のエコロジー (経済)」と「ロマン派のエコロジー (自然)」——の統合の可能性を示すところにある。

本稿は、ラスキンとマルクスの議論を手がかりとした、現代という時代的「悲劇」からの自然と人間の救済と、人間の自己実現のために必要不可欠な「倫理」——「理念・目標」——の提示で終る。本稿のめざすところは、あくまで、手段体系としての政策・技術が向うべき北極星を明確にし、それを提示することである。

第1章 「科学のエコロジー」と「ロマン派のエコロジー」

「科学のエコロジー」と「ロマン派のエコロジー」を通底するキーワードは「生命の網の目 (生命系)」と「ガイア (自然系と生命系の共生)」という二つの言葉であり、この二つのキーワードによって「エコロジー」概念の核が構成されている。その故まずこの二つのキーワードから、両者を通底する「エコロジー」概念の核となっているものを示すことにしよう。

人間を含めてすべての「生きとし生けるもの」は「生命連鎖の網の目」のなかの一つの環として息づいており、それらの一環・一環は、相互に、相互依存・相互扶助・相互創造といった、相互性、関係性のなかで「共

生」している。「エコロジー」概念の核をなすものは、この「生きとし生けるもの」の相互的な「共生」関係——それをエコロジストは「生命の網の目」と呼んでいる——にある⁽¹²⁾。エコロジストたちは、まず何よりも、この「生命の網の目」という「生命体」相互の「共生」関係を事実として認め、その事実を中心にすえた世界観をもっているのである。

いまここで「科学のエコロジー」（「エコロジー経済学」）にならって、「生きとし生けるもの」を、人間を含めた「動物」、「植物」、「微生物」に単純化して、「生きとし生けるもの」の「共生」関係（「生命の網の目」）の一例をみておくことにしよう⁽¹³⁾。

「動物」と「植物」と「微生物」とそれが織りなす「生命の網の目」の生存・存続は、太陽からおくられるエネルギーとそれをめぐる三者の「共生」関係によってはじめて可能になる。三者の「共生」関係のなかにあって、「植物」は「生産者」である。何故なら、植物は「光合成」によって、太陽エネルギーを「生命の網の目」のなかにとりこんでいるからである。人間を含めた「動物」は「消費者」である。何故なら、「動物」は「植物」を食することによって、「植物」がとり入れたエネルギーを消費しているからである。しかし両者は「光合成」の際の酸素と炭酸ガスの交流によって、相互に「共生」している。さらに「微生物」は「分解者」である。「微生物」は動植物の死骸や人間の生活・産業排出物を分解するなかで生存を保ち、分解物を大地に還元することによって、動植物の生存に貢献している。

以上で生命世界のエコロジカルな「共生」関係を、「科学のエコロジー」（「エコロジー経済学」）にならって、「動物」、「植物」、「微生物」に単純化して示したが、エコロジストたちは生命世界におけるあらゆる「生きとし生けるもの」は、すべて、「生命の網の目」の一環をなし、相互に「共生」し合い、「クジラからウイルスまで、樫の木から藻類まで、生きとし生けるものすべては」相互に依存、扶助しあって生きているという事実を根底にすえるのである。

しかしそれだけではない。エコロジストたちは、さらに、その上になつて「生命系」と「自然系」との有機的な連関を仮説している⁽¹⁴⁾。つまり彼らは「生命の網の目」をなす「生命系」は、さらに、それをとりまく大地や天空——山や海や土壌や空気など——といった「自然系」と深く結びつき、その結びつきのなかで、生命圏、大気圏、海洋、土壌などはひとつの有機的な複合体——ホメオスタシスな（恒常性を有する）「ガイア」——をなしていると仮説するのである。

こうして、「生命の網の目」という科学的な事実と、有機的な統一体としての「ガイア」の仮説とを基礎にして、エコロジストの『「生命の網の目」を中核とするガイア中心の世界観』が登場することになる。

以上我々は「科学のエコロジー」と「ロマン派のエコロジー」との共通のベース——両者を「通底するもの」——を概観した。我々は次に、両エコロジーの内容をもう少し掘り下げ、それぞれの特徴を示し、両者を決定的に分つものをもておくことにしよう。

「科学のエコロジー」の特徴は「生命系」内部のエコロジカルな「共生」関係——「植物」、「動物」、「微生物」間の「共生関係」——および「生命系」と「自然系」との相互連関とを、主として経済学分野から、あくまで、科学的に追求しているところにある。そして、「生命系」内部および「生命系」と「自然系」とのエコロジカルな「共生関係」という科学的[・]事実を基礎にして、それは、主として経済学的観点から、「産業資本主義」——工業化が進展するなかでの「資本主義」——がもたらした「悲劇」からの人間の救済を志向している。しかもそれは、「生きとし生けるもの」の生命とその連鎖（「生命の網の目」）を支える根源の力は太陽エネルギーであるという科学的[・]事実と、「地球の収容能力」には限界があるという科学的[・]事実とを動かしがたい事実としてみすえ、科学技術をもって、「悲劇」からの人間の救済を志向している。

それ故、それが主として関心を寄せるのはエネルギー問題と、それと関連した、エントロピーの問題である。

「科学のエコロジー」は、端的ないい方をすれば——少なくとも「マルクス主義のエコロジー」に関するかぎり——、「エネルギーの経済学」の観を呈している。それに従えば、「富」とは対象に具体化された何らかの形の有用エネルギーであり、従って、「富」なるものは、太陽を源流とするフローのエネルギーと大地に蓄積されたストックのエネルギーの有用利用によって創出される、ということにされている。たとえばポドリンスキーがフィジクラートの継承者として、工業に抗して農業中心の産業構造を構想するのも、その主たる根拠をエネルギー問題——農業（「植物」というエネルギー・フローに於る「生産者」の役割の重視——に置いていると考えられるのである。

それが関心を寄せる第2のものは、エントロピーの問題である。「地球の収容能力」ということを考慮にいれて、エントロピーをいかに低くおさえ、地球をホメオスタシスな定常状態に保つことができるか。ここに「経済圏」から「生活圏」へという発想が出現する。工業の発展にともなう都市化をエコロジカルに批判し、都市はあくまで農業に調和したものでなければならないとしたゲッデスの基本構想を継承して、それは、「エントロピーに抗する生命圏」という観点に立って、「生命系」内部と「生命系」と「自然系」とのエコロジカルな連関を土台とした「生活圏」の形成を志向している。

以上概観したような内容と特徴をもつ「科学のエコロジー」は「エコロジー」中心の立場に立つとはいえ、次の2点で「人間中心主義」の残滓をとどめている。第1は、それが、あくまで、人間の生存と福祉のためのエコロジー——人間のためのエネルギーとエントロピー問題の解決——という側面をもちつづけている点であり、第2は「エネルギー問題」であるにせよ「エントロピー問題」であるにせよ、その解決の方策を科学技術——人間の自然支配——にたよっている点である。

それ故、「科学のエコロジー」は「ディープエコロジー」のネスの言葉を借りていえば、「シャローエコロジー」にとどまるのだ。

次に「ロマン派のエコロジー」に移ることにしよう。

「ロマン派のエコロジー」の特徴を典型的に示すものとして、まず、ルソーの『エミール』にある次の言葉を紹介したい。

「動く物質はある意志をわたしに示してくれるのだが、一定の法則に従って動く物質はある英知をわたしに示してくれる。これがわたしの第二の信条だ。行動し、比較し、選択することは、能動的な、ものを考える存在者の行なうことだ。だから、そういう存在者が存在するのだ。どこに存在するのが見えるのか、とあなたはきくだろう。回転する天空のなかにだけでなく、わたしたちを照らしている太陽のなかにも存在するのだ。わたし自身のうちだけでなく、草をはむ羊、空を飛ぶ小鳥、落ちてくる石、風に吹かれていく木の葉のうちにも存在するのだ。……宇宙を構成している存在がそれによってたがいに助けあっている内密の対応関係をもとめることはできる。」(参考文献〔I〕、P.139～40)。

ここでルソーは次のようにいっているのだ。天地宇宙は混沌ではない。そこには調和と秩序とがある。それ故、その背後には調和と秩序を保っている力——意志と英知——の源泉としての「超越者」が存在するはずだ。どこに？ それは「回天する天空のなかに」、「わたしたちを照らしている太陽のなかに」、「わたし自身のうちに」、「草をはむ羊、空を飛ぶ小鳥、落ちてくる石、風に吹かれていく木の葉のうちに」。そしてその「超越者」の意志と英知により、「森羅万象」——宇宙を構成している諸存在——は調和と秩序を保ち、たがいに助けあい、内密の対応関係を示している、と。

ここには「ロマン派のエコロジー」なる概念⁽¹⁵⁾の根本をなすものが表現されている。それは「超越者」の「霊的な力(意志や英知)」を内在する、「天地宇宙の諸存在——「森羅万象」——の大きい連鎖」(たとえばポープらのいうがごとき意味における)と要約することができる。

「ロマン派のエコロジー」の内容・特徴をさらに深く理解するために、次に、ワーズワースの次の詩（「ティンターン修道院上流数マイルの地で」）の一片を紹介することにしよう。

「私は自然を無分別な若者の頃とは違う眼で見ることを学んだ。……目には見えない力があり、高められた思いが喜びとなって私の心をかき乱した。それははるかに深く浸透した何ものかに対する崇高な感覚で、それが存在するのは落日の光の中であり、円い大洋であり、新鮮な大気であり、青空であり、人の心の中であった。それは湧き起こる衝動であり、精神であり、思考する主体と、思考の対象すべてを促し、万物のなかを駆けめぐらる。それゆえに変わることなく私は愛し続ける——牧場、森、山、この緑の大地から眺め見る眼と耳によって得られるあの偉大な世界を。それは眼と耳が半ばは創り出し半ばは知覚する世界。私は自然と感覚の言語のなかに私の最も純粋な思考の錨、育み手、導き手、私の心の守護者、私の全精神存在の神髄を見いだして満足する。」（参考文献〔9〕、P.61～3。○印は筆者による）。

「落日の光のなかに」、 「円い大洋のなかに」、 「新鮮な空気のなかに」、 「青空のなかに」、 「人の心の中に」、 つまり、「森羅万象」を構成する万物のなかに「目にはみえない力」がかけめぐり、それが全存在の神髄をなしている。このワーズワースの直覚は先に示したルソーのそれと完全に重なり、「ロマン派のエコロジー」の神髄をなしている。

ルソーとワーズワースとのちがいは、ルソーにあっては「存在の大いなる連鎖」の背後にある「超越者」の存在が強調されているのに対し、ワーズワースにあっては「超越者」の姿は薄らぎ、「存在の大いなる連鎖」に内在する「目には見えない力」⁽¹⁶⁾が強調されているところにある。そのぶんワーズワースにあっては人間の感覚が重要な役割をになうことになる。すべての精神的存在の神髄をなす、あの「偉大なる世界」は半分は「自然」がそしてその半分は「感覚」が創り出したものであると。ラスキンを

はじめとする「ロマン派のエコロジスト」たちは、「目にはみえない力」が内在する「自然」と「感覚という言葉」にその「導き手」を求めたのである⁽¹⁷⁾。

かくしてルソー→ワーズワースを源流とする「ロマン派のエコロジー」の思想は次の二つの特徴を有することになる。第一は、「存在の大いなる連鎖」として相互連関をなす「自然」のなかには「隠されてはいる」が、ある種の「現存」——「美的・靈的力」あるいは「生命力」——が内在しており、人間は「感覚」を媒介としてその「現存」の高みに合一し、自らの生命⇒精神を更新し高めることができるという思想であり、第二は、そのような力を内在する自然は、「存在の大いなる連鎖」としてそれ自体ひとつの統一的な「生命体」をなしているという思想である。

「ロマン派のエコロジー」にあつては、「生命の網の目」をなす人間を含めた森羅万象は科学的事実として「共生」関係にあるだけでなく、「ひとつの生命体」から生成してきたものとして同一の生命を分与し合い、「魂」の次元でつながっていると考えられているのだ。

「ロマン派のエコロジー」のこのような思想は森羅万象の万物に「仏性」の内在を認める、仏教的アニミズムに極めて接近している。「科学のエコロジー」は「ロマン派のエコロジー」のこのような「自然観」を「魔術的なもの」、アニミズムへの逆もどりとして断古拒否する。両者が決定的に対立するのはこの点にある。

J・E・ラヴロックの「ガイアの仮説」は、以上論じてきたような、共通のベースと対照・対立をもつ、「科学のエコロジー」と「ロマン派のエコロジー」との統合の試みの一例とみることができる。

ラヴロックの「ガイアの仮説」は、あくまで、科学的事実を根拠に仮説されている。そのかぎりではそれは「科学のエコロジー」の系譜に属している。しかし、ラヴロックが「生きとし生けるものすべては全体でひとつの生命体をなしているという仮説」をたて、「その生命体は、みずからの総体的必要に応じて地球の大気をコントロールする能力をもち、構成要素ひ

とつひとつのそれをはるかに超えた機能と力をそなえている」(参考文献〔23〕, P.33~4)と断ずる時、また、その論拠として、「われわれの本能のなかにはまた、周囲の生命形態との関係において、最善の役割を認知するというプログラムも組みこまれているかもしれない」(参考文献〔23〕, P.256)といい、さらに、人間の「適合性を美に結びつける本能」まで仮説して、「私たちがその同じ本能でもって、人間を含むさまざまな生き物や、他の生命形態の集合でできたひとつの環境の美と適合性をも認識できると考えるのはゆきすぎだろうか」(参考文献〔23〕, P.257)という時、ラヴロックの「ガイアの仮説」のなかには、明らかに「ロマン派のエコロジー」の思想が導入されている。ラヴロックは「ロマン派のエコロジー」のいう、「自然界」に内在する「目にはみえない力」を、人間をはじめとしてあらゆる生命形態が本有する「本能力」に求めているのである。

ラヴロックのこの統合の試みは、「悲劇」に直面している、我々の時代的要請にこたえたものである。しかし、我々の時代的課題である、「経済」と「自然」との統合は、すでに、両潮流の源流をなす、マルクスとラスキンによってそれぞれの側から試みられていた。ラスキンは「ロマン派のエコロジー」のいう、「自然界」の万物に内在する「目にはみえない力」を「固有価値」というキーワードをもって継承しつつ、またマルクスはそれを「本質諸力」というキーワードにおきかえそこに内在する「魔術的なもの」を駆逐しつつ。そして両者はそれぞれの側から「産業資本主義」とそれを支える「古典派経済学」によってもたらされる文明の「悲劇」を批判し、そこからの人間の救済と自己実現を可能にする「学」の構築を志向した。彼らが構築しようとしたその「学」にこそ、我々の時代の進路を示す北極星——「理念目標」——が輝やいている。

以下我々は「エコロジー」(自然の万物の「共創的相関関係」と「自己実現」(「相互固有価値」あるいは「相互本質諸力」の実現)という観点からマルクスとラスキンの思想の核を論じ、もって、「科学のエコロジー(経済)」と「ロマン派のエコロジー(自然)」の統合の可能性をみていく

ことにしよう。

第2章 ラスキンの「ブルジョア文化」批判

ここで「ブルジョア文化」というのはマルクスとラスキンとが眼前にみた、「人間中心主義」的な啓蒙思想の潮流のなかで、「産業資本主義社会」——工業化が進展する資本主義社会——とそれを支える「古典派経済学」を土台として花咲いた文化をいう。

マルクスとラスキンとはこの「ブルジョア文化」がもたらした「文明の病患」(ラスキン)を根底から批判した点で共通の地盤の上に立っている。しかも両者の「ブルジョア文化」批判は、以下に論ずるように、極めて類似している。

豊かな富の上にあぐらをかく「ヴィクトリア体制」下の「ブルジョア文化」へのラスキンの批判は次の4点に要約できるであろう⁽¹⁸⁾。

第1はラスキンの「ブルジョア文化」批判の原点をなすものである。それは「古典派経済学」の「労働価値説」にもとづく、ブルジョア的「富」に対する批判である。ブルジョア的「富」は単なる「塵芥の贈りもの」にとどまっているだけでなく、「富の反対物」になりさがっている。何故ならそれは「生の増進 (advancement in life)」——「魂を活気づけ、生命を生産し、広げ、豊かにする」こと——に役立っていないどころか、かえってそれを阻害している。さらに悪いことには、ブルジョア的「富」は「他人の労働を支配する力」となってたちあらわれることによって、労働者に「否定的労働 (negative labour)」をおしつけているからだ⁽¹⁹⁾。ラスキンはマルクスが「疎外された労働」というキーワードで論じたのと全く同様に、ブルジョアの富がもつ両側面——それが「否定的 (疎外された) 労働」の所産であると共にその原因にもなっているという両側面——を確実にとらえ、それを批判しているのである。

第2は「ブルジョア文化」を支える階級関係の批判である。ブルジョア

が享受している富と娯楽とは貧乏人（労働者）の犠牲の上に成立しているということ——ブルジョア的富は労働者の労働の搾取の結果であるということ——をラスキンは見抜き、それを批判しているのである⁽²⁰⁾。

第3は以上のような経済的土台⇒「富」の上に営まれる、ブルジョア的生活様式とそこにあらわれた人間性の腐敗・墮落への批判である。ラスキンは同時代人たちを次のように批判している。あなたがたは「金もうけという虚偽の仕事」に全エネルギーを注ぎこみ、「娯楽にふけること」だけに心を奪われている。それがいまや国民的願望となり、さらには、目的となってしまうている。そしてそのぶんだけ人々は「無感覚」になり、「放縦」になり、「慈悲心」を失ってしまっていると⁽²¹⁾。

第4は「自然美」の破壊への批判である。

「皆さまは、自然を軽蔑してられました。いいかえれば、自然の風景についてのあらゆる深遠・神聖な感情を、軽蔑しておいでです。」（参考文献〔6〕P.204）。

ラスキンがここで「自然の風景についてのあらゆる深遠・神聖な感情」とそれを賞讃しその喪失をおしむ時、そこには、ラスキンを流れる「ロマン派のエコロジー」の潮流——「自然」の能動性つまり「自然」の万物に内在する「目にはみえない力」からの人間の魂への衝迫の思想——が息づいていることをみてとることができる。

以上、ラスキンの「ブルジョア文化」の批判を4点に要約した。ラスキンはそのような「ブルジョア文化」にみられる「文明の病患」の究極の原因を自由放任下にあるブルジョア的経済とそれを支える「古典派経済学」に求め、そこからの人間の救済——「生の増進」を可能にする「経済」のあり方——を論じたのである。

マルクスの「ブルジョア文化」批判は、その経済的土台を撃つ、「疎外された労働」と「物象化」という二つのキーワードによって、その核心と

なるところが示されている。

マルクスの「ブルジョア文化」批判の原点は、ラスキンの場合と同じく、「古典派経済学」によって理論武装されたブルジョア的「富」が、ラスキンの言葉を借りていえば、いかに「富の反対物」になりさがっているかを示すことにおかれている。

マルクスに従えば、「生産物→富」というものは、本来、人間的生命活動——人間労働——によって、「自然」の「本質諸力」と「人間」の「本質諸力」とが統一的に統合され、それらが実現され、統一物として物質化したものであるとされている。別言すれば「人間」の内奥に潜んでいた「人間」の「内面の富（本質諸力）」と「自然」の内奥に潜んでいた「自然」の「内面の富（本質諸力）」が、人間労働によって表にあらわされ、その両者が結合して「生産物」という「富」となって実現したものであるとされている。それ故、「人間」と「自然」の「本質諸力」の結合的実現としての「生産物→富」は、ラスキンの言葉を借りていえば、「生の増進」を押しすすめてくれるはずのものである。

ところが「私有財産」——「生産手段の私的所有」——の関係の上に成り立つブルジョア社会にあっては、労働者がつくり出した「生産物→富」は、労働者に疎遠なもの、敵対するものとなってたちあらわれている。ブルジョア社会にあって人間は自らの労働によってつくり出した「生産物→富」の奴隷とされている。それ故、そこにあるのは、人間労働による「人間」の「自己実現」が「人間」の「自己喪失」となって現象することになり、人間の内面世界と外的物質世界は、削れば削るほど貧しくなっていくことになっている⁽²²⁾。

さらにマルクスはつづけていう。このようなブルジョア社会を貫く「疎外された労働」はたんに生産の結果（「生産物→富」）においてだけに現れるのではない。それはまた生産活動そのもののうちにも現れると。マルクスはブルジョア社会を貫く「人間労働の疎外」をラスキンのいう「否定的労働」という言葉と同じ響をひびかせて次の言葉で表現している。

「労働が労働者にとって外的であること、すなわち、労働が労働者の本質に属していないこと、そのため彼は自分の労働において肯定されないでかえって否定され、幸福と感ぜずにかえって不幸と感じ、自由な肉体的および精神的エネルギーがまったく発展させられずに、かえって彼の肉體は消耗し、彼の精神は頽廢化する、ということにある。」(参考文献〔3〕, P.91)。

労働が労働者にとって外的なものであってはならず労働者の本質に属するものでなければならない、労働において労働者は否定され不幸を感じてはならず肯定され幸福を感じねばならない、労働において労働者は肉体的消耗と精神の頽廢化をなしてはならず自由な肉体的・精神的エネルギーが「生の増進」をおしすすめるものでなければならない。このイデーにおいて、マルクスとラスキンは完全に重なっている。

マルクスの「ブルジョア文化」への批判はその「富」への批判（「生産物の疎外」）、その「否定的労働」への批判（「労働の疎外」）に加えて、さらに、そこにおける人間の非人間への批判（「人間からの類の疎外」→「人間からの人間の疎外」）にむけられている。

マルクスに従えば、動物的な生命活動から直接に人間を区別するものは、人間が「意識している生命活動」をおこなっていること、もう少し詳しくいえば、人間が他の動物とちがって、自分の生命活動そのものを自分の意欲や自分の意識の対象にしつつ、意志や目的をもって生命活動をおこなっていること、にある。マルクスに従えば、人間のこの自由な意識的生産活動こそが人間の類的生活なのである。

以上のように、人間の生産的生活は、本来、意識・意志・目的という人間に固有な能力がデザインする生産物を生産する類的な活動であったはずである。ところがブルジョア的の社会にあっては、そこに於る「疎外された労働」が人間から自然（生産物）を疎外し、生命活動を疎外することによって、人間を類から疎外してしまっている。人間の類的生活を個人生活の

手段に転落させてしまっている。つまりブルジョア社会にあってはそこに於る「疎外された労働」が、人間が類的存在であるからこそはじめて可能な人間の自由な生命活動を、彼の生存のための一手段に逆転させてしまっている（「人間からの類の疎外」）。その帰結は何か。人間的なものが動物的なものになり、動物的なものが人間的なものになる（「人間からの人間の疎外」）ということである。

以上のごとくマルクスは「疎外された労働」というキーワードをもって「ブルジョア文化」の経済的土台を告発するのである。

ここでは詳論できないが「疎外された労働」ということとあわせて「ブルジョア文化」の経済的土台でもうひとつ問題となるのは、「自然成長的分業」——「生産の無政府性」——に起因する「物象化」という現象である。自然成長的な分業社会にあっては、人と人との関係が物と物との関係としてあらわれざるをえず、その物と物との物象的關係が「強力」となって人間社会を支配するという現象である。

かくしてマルクスにあっては「自然成長的分業」の止揚→「計画的生産」ということと「生産手段の私的所有」の止揚→生産手段の共同所有による「社会・共産主義社会」の建設という、「生産関係」上の問題が「人間の解放」の主要課題として追求されることになる。

ここで我々は再度マルクスとラスキンの問題にたちかえろう。

以上で示したように、マルクスとラスキンとは極めて類似した「ブルジョア文化」批判を展開している。しかし両者が類似しているのはそれだけではない。

両者は共に「人間」と「自然」との「共創的相関関係」のもとの「自己実現」——マルクスにあっては「相互本質諸力」の実現、ラスキンにあっては「相互固有価値」の実現——をめざし、その実現は「人間中心主義」にたっていたのでは不可能で、「エコロジー」——人間相互の、また、人間と自然との「共生」関係つまり自然の万物の「共創的相関関係」——を中心にすることではじめて可能になると認識していた点で、共通の土依

の上に立っている。

以下、そのことを詳論することにしよう。

第3章 ラスキンの「経済」と「自然」との統合

——「自己実現」(「生の増進」→「人間的完成」)の論理——

1. 「固有価値 (intrinsic Value)」

——新しい「富」概念の創造——

ラスキンにあって「経済」と「自然」とを統合するキーワードは「固有価値」という言葉であり、両者の統合の試みは「固有価値」というキーワードにもとづいて新しい「富」概念を創造し、それを自分の「経済学」の土台にすえることによってなされた。

それ故、まず、ラスキンの「固有価値」というキーワードから論ずることにしよう。

ラスキンにあって「固有価値」というのはそれぞれの諸個人が生れながらもつ生得的な「力」もしくは「資質」をいう。それをわかりやすい言葉で、それぞれの諸個人に固有の「内面の富」あるいは「本来の面目」といいかえても誤りではないであろう。さらに、マルクスの「本質諸力」という言葉にかぎりなく接近しているともいえるであろう。しかし「固有価値」はなにも人間にのみ固有なものであるわけではない。ラスキンにあっては「自然」の万物——「一束の小麦」, 「清浄な空気」, 「一群の草木」 etc ——や「諸生産物」——「家、什器、諸道具」, 「食物、医薬品、衣服」, 「書物、芸術品」 etc ——のそれぞれのなかに「固有価値」が「生賦与の力・資質」として宿っているとされており、むしろ、「自然」の万物に「固有価値」が内在するという点にこそラスキンの思想・経済学の積極性があるのである。

「固有価値とは、任意の物のもつ、生を支える絶対的な力である」(参考文献〔8〕, P.39)。

しかもラスキンは人間を含めた「自然」の万物に内在する「固有価値」という「生賦与の力」は「創造者から得た力」だといいい切っている。以上から明白にわかるように、ラスキンは「固有価値」というキーワードで「自然」の万物に内在する能動性、つまり、魂や美意識を衝動し精神を高揚せしめる「目にはみえない力」を原点にする「ロマン派のエロジー」の思想を継承したのである。

次いでラスキンは「否定的労働」→「メラの水」→「生の破壊」の水路を断ち切り、「肯定的労働」→「生命の水」→「生の増進」の水路をきりひらくべく、古典派経済学の労働価値説にもとづく古い「富」概念を駆逐して、「固有価値」というキーワードのもとに新しい「富」概念を創造した。ラスキンは「富」概念を次のように定義する。「富」とは「実効的価値 (effectual Value)」をいい、それは万物の「固有価値」と人間の「受容能力」の相互性のなかで成立すると。つまり、「富」とは「実効的価値」のことをいい、それは、「固有価値」と「受容能力」とがあい伴う場合に存在し、両者のうちのどちらか一方が欠けた場合には存在しないものであると。

「固有価値と受容能力とがあい伴うばあいには、『実効的』価値、つまり ^{ウエルス} 富が存する。固有価値、受容能力のどちらかが欠けるばあいには、実効的価値は存せず、すなわち富は存しない。」(参考文献〔8〕, P.40)。

ラスキンは「富」とは「固有価値」+「受容能力」なりと定義することによって、人間の「受容能力」を「富」概念の重要な構成要素に導入し、人間の「受容能力」が欠けた場合には、いくら「自然」や「生産物」に「固有価値」が内在していても、それは「富」にはならないとしたのであ

る。

「一匹の馬も、われわれが乗ることができないならわれわれにとって富ではないし、一幅の絵も、これを鑑賞することができないならやはり富ではないし、どんな高貴な物も人間にとってのほかは富ではありえない。」(参考文献〔8〕, P.40)。

ところで「富」概念を構成する人間の「受容能力」というのは人間に内在する人間の「固有価値」(人間に固有の能力)の一側面を意味し、それは人間の「生の増進」と共に豊かになっていくものである。つまり「生の増進」というのは人間の「固有価値」=「受容能力」の生産によって押しすすめられていくものなのだ。

ラスキンの経済学の特徴は、このように、それが「自然」の万物に内在する「固有価値」の生産と人間に内在する人間の「固有価値」の生産との相互連関から「富」の増大をとらえたところにあるといえる。それ故ラスキンの経済学にあって、「富」の生産には常に二つのことが要請されることになる。万物に内在する「固有価値」の生産という要請と人間の「固有価値」としての「受容能力」の生産という要請である。

「それゆえに、実効的価値の生産はつねに二つの要請をふくむ。まず、本質的に有用な事物を生産すること、つぎにはそれを使用する能力を生産すること、がこれである。」(参考文献〔8〕, P.40)。

ラスキンは以上のような、重層的な内容をもつ「富」概念をその「経済学」の土台にすえて、「経済」と「自然」との統合を企てているのである。

2. 「経済 (学)」の目標

—「生の増進」→「勇敢人 (VALIANT)」の育成→「真の富の実現」—

ラスキンにおいて「経済」とそれを支える「経済学」のめざすところは「生の増進」とそれをつうじての「勇敢人」の育成におかれている。

ここでラスキンのいう「生の増進」とは人間の生命活動の活発・充実・拡大→精神の高揚を意味し、「勇敢人」というのは「生の増進」をつうじて人間的完成に達した人物——自己の生を肉体的、感情・情念的、精神的に拡大・増進させて「勇氣 (valor)」を得た人、ルソーの言葉を借りていえば、「良心」にもとづいて自律的に自立する「有徳の人」⁽²³⁾——を意味する。

「勇敢人」の「価値あるものの所有」。それこそが真に「富」と呼びうるものであり、「経済」が究極にめざすのも、そこにあるとされている⁽²⁴⁾。

それではそのような「勇敢人」の育成とそのもとではじめて存在しうる(真の)「富」の生産はいかにして可能なのであろうか。

先に論じたように、そのためには、まずなにはともあれ、自然に内在する「固有価値」の実現・生産と人間に内在する「固有価値 (受容・使用能力)」の実現・生産の二つが要請されることはいうまでもない。ラスキン経済学での「富」の生産に関するこの二つの要請は、ラスキンの経済学が単に「物質的財貨」の生産に関する学であることを超え、さらに、「政治・経済学」の領域にとどまることを超えて、広く「人間育成の学」、つまり、「受容・使用」能力の育成をめざす「教育学」の領域にまでふみこんでいることを意味する。ラスキンの「経済学」は、このあとすぐ論ずるように、最終的には「経済」と「自然」との統合をめざす「人間づくり」の学なのである。

「経済」と「自然」との統合をめざすラスキンの「人間づくり」の学には、三つの主体が登場する。それぞれがそれぞれの「固有価値」を所有する、「自然」と「事物 (生産物)」と「人間」という主体である。

ラスキンの経済学はエコロジカルな「共創的相関関係」のなかにある、この三つの経済主体が、以下に論ずるがごとき相互的共働のなかで、広い意味の「教育（人間づくり）」をおこない、「勇敢人」を育成し、もって、「経済」と「自然」との統合のなかにある「富」を生産することをめざし、そのことによって、「経済」と「自然」とが調和した経済社会の実現をめざしているのである。

次に、その論理を論じよう。

3. 「自然」と「人間」と「生産物」との「共創的相関関係」による 「相互固有価値」の実現

——「経済」と「自然」との統合による人間的完成の論理——

ラスキンにあっては「勇敢人」の下にある「富」こそが（真の）「富」であるとされていることはすでに示した。ラスキンにあっては、さらに、そのような「富」こそ、「経済」と「自然」との統合の実現形態であるとされている。

ラスキンにあって「勇敢人」の下の「富」こそが「経済」と「自然」との統合の実現形態とされるのは何故なのか。その理由はこれからの展開で示されるが、結論だけ先どりしていえば、「勇敢人」の下にある「富」こそが「自然」と「人間」との「共創的相関関係」による「相互固有価値」が実現されたものであるからだということになる。ラスキンは人間を含めた自然の万物の「相互固有価値」が実現された「富」を土台とする「経済」を、そしてそのような「経済」に於てはじめて可能な、「自然」と「人間」との調和のある社会を理念・目標として追求したのである。

以上、結論を先どりして示したが、ここであらためて、本節のテーマを問い直すことにしよう。それではラスキンにあって「経済」と「自然」との統合を可能にする、「自然」と「人間」との「共創的相関関係」による「生の増進」→「勇敢人の育成」と、それと同時に進行する、「相互固有価値」の実現とはどのような内容をもつものなのであろうか⁽²⁵⁾。また、そ

のことによって、いかなる論理で「自然」と「経済」との統合が可能になるのであろうか。

以下、そのテーマについて詳論することにしよう。

「相互固有価値」というのは万物が相互性のなかで創り出す、それぞれの「固有価値」の混合・融合・結合をいうが、ラスキンの経済学にあっては、その実現には三つの経済「主体」が登場する。第1は「自然」、第2は「人間」、そして第3は両者が共創した、従って両者の「固有価値」が「相互固有価値」として実現している「生産物」という主体である。

「相互固有価値」の実現のベースとなるのはこの三つの経済「主体」に内在する「固有価値」である。

ラスキンは「生の増進」とそれにもとづく「勇敢人」の育成を可能にする、「固有価値」を有するものを「価値ある有形物」と呼び、それを五項目に分類している⁽²⁶⁾。第1項目は「自然」。「土地。これに付随した空気、水、もろもろの生きもの」。ここに「自然」という主体が登場する。第2項目と第3項目は「生産物」。「家屋、什器、諸道具 etc」, 「食物、衣服、医薬品、趣味用品 etc」。ここに「生産物」という主体が登場する。第4項目は「書物」、第5項目は「芸術品」。「書物」と「芸術品」に実現された「固有価値」は、もともと人間に内在していたものであるから、ここに、「人間」という主体が登場する。

ラスキンの経済学にあっては、それを構成するこの三つの経済「主体」はエコロジカルな「共創的相関関係」の下にあるとされている。そして「共創的相関関係」の下にこの三者が協働し、「広い意味の教育」活動——「生の増進」→「勇敢人」の育成——をおこなうなかで、それぞれに内在する「固有価値」を「相互固有価値」として共創的に実現していくとされているのである。以下、その内容をみていこう。

まず「自然」という主体と「人間」という主体の、「共創的相関関係」による「相互固有価値」の実現から論ずることにしよう。

ラスキンは「自然」という主体に内在する「固有価値」は二重のもので

あると論じている。「自然」に内在する「固有価値」の第1の側面はそれが生命力の源泉になっているという側面——「食物および動力」を生む側面、つまり、清澄な空気や水の働き、光合成によるエネルギーの生産の側面——であり、第2の側面は人間の魂や美意識に働きかける側面である。ラスキンは「自然」に内在する第1の側面の「固有価値」の発揮は、人間の肉体的な「生の増進」を支え、第2の側面の「固有価値」の発揮は人間の、感覚的、情緒的、知的な「生の増進」を支えているとみていたのである。

「自然」と「人間」との「共創的相関関係」の下における共創は人間が「自然」に内在する「固有価値」を大切にし——「自然保護」——、さらに、「自然」の「固有価値」を、生産に於て正しくひき出すことに基礎を置く。次いで、その際、人間が自己に内在する「固有価値」を自然素材に正しく注ぎこむことがつづく。

このことがおこなわれると、「自然」に備わる「固有価値」と「人間」が所有する「固有価値」との合作——「相互固有価値」の実現——としての、豊かな「固有価値」を有する「生産物（富）」が生産され、それが人間の「生の増進」を支える。それだけではない。その生産物のなかには生産者の「固有価値（自己）」が実現されているのであるから、その生産物を創造する労働は自己を実現する労働として肯定的なものになる。

以上の論理によって「生の増進」は「自然」と「人間」との「共創的相関関係」による「生産物」という「相互固有価値」の実現されたものによって、おし進められていくのだ。

次に「人間」と「生産物」との「共創的相関関係」を論ずることにしよう。

「家屋」, 「什器」, 「諸家具」, 「食物」, 「医薬品」等のそれぞれには、それぞれの「固有価値」が内在しており、それぞれに質を異にする、それぞれの「固有価値」によって人間は「生存」, 「安寧」, 「健康で幸福な生活」を支えてもらい、さらには、「生命の活性化」の恩恵をうけている。

そもそも「生産物」というのは「自然」に備わる「固有価値」と「人間」が所有する「固有価値」との合作として造り出されたものである。それ故、「生産物」のなかに「自然」の「固有価値」としての「生命の源泉」や「美の源泉」が実現されていなければならないほど、また、人間の「固有価値」としてのデザイン（意匠）能力が実現されていなければならないほど、その「生産物」は高い「固有価値」を有し、人間の「生の増進」→「勇敢人」の育成を支えてくれるのである。

最後に「人間」と「人間」との「共創的相関関係」を論じよう。

人間の人間たるゆえんとしての、人間の「固有価値」は、ラスキンにあっては「勇敢人」に理念的に内在する、人間の道徳性（高潔な魂）と、その美意識に支えられたデザイン（意匠）能力——それが使用・受容能力につらなる——にもとめられている。そしてこの人間に固有の能力の発揮によってはじめて、「勇敢人」は育成されるとされている。しかし、それは「人間」と「人間」との直接的な交流——言動をつうじての「固有価値」の相互発揮——でのみなされるわけではない。

ラスキンにあって人間相互の「共創的相関関係」による「固有価値」の高め合い→「勇敢人」の育成で直接的な交流とならんで大きな役割を演じているのは、人間相互の「相互固有価値」の実現としての「生産物（工芸品、美術品、書物 etc）」である。人間と人間とは相互にその「生産物（工芸品、美術品、書物 etc）」—「相互固有価値」が実現されたもの—を媒介として相互にそれぞれの「固有価値」を豊かにし、高め合っていると考えられているのだ。

たとえば「芸術作品」である。

「自然美」に触発されて人間は自己の「固有価値」の発揮としての意匠をめぐらし、「芸術作品」をつくり出す。それは単に「自然」と「人間」との「相互固有価値」の実現物であるだけでなく、それがつくり出されるに至るさまざまな人間の、さまざまな意匠をめぐり、「人間」と「人間」との「相互固有価値」が実現されたものである。そのような「相互固有価値

値」の「実現」としての「芸術作品」はそれが内在的に所有する「固有価値」によって他者に働きかけ、他者の魂や美意識を高め、さらに使用・受容能力→意匠能力を高め、「勇敢人」を育成する。

「書物」もまたさまざまな人間の「共創的相関関係」による「相互固有価値」の実現の上に立つ、その著者の独自の「固有価値」の発揮の所産である。「芸術作品」であるにせよ「書物」であるにせよ、真に「富」と呼ぶうる作品のなかにはその作者の究極の「固有価値」——その作者の「精髓」——がそれまでに実現された「相互固有価値（諸作品）」に付加されて実現されているとして、ラスキンは次のようにいっている。

「これが自分の精髓である。他の点では、食べたり飲んだり寝たり、愛したり憎んだりしたことは、他人と同様である。わが生涯は、たちまち消える霧のようなもので、いまや存在しない。けれども、これだけは自分が見つけた、考えたことであって、もし自分のうちで、なにか諸君の記憶に値するものがあるとすれば、これこそがそれなのである。」(参考文献 [6], P.171~2)。

「書物」であれ「芸術品」であれ、このような「精髓」が実現されてある「生産物（作品）」こそ、「相互固有価値」の実現としての真の「富」であり、それによって、人間の魂と美意識と意匠は高揚し、「勇敢人」へと育成されていくのである。

以上論じてきたように、ラスキンの理念・目標とする社会は「自然」と「人間」と「生産物」という三つの経済「主体」のエコロジカルな「共創的な相関関係」を枠組として、その三者の共働によって共創される「相互固有価値」の実現としての「富」、つまり万物の「相互固有価値」の実現というかたちで「経済」と「自然」とが統合されている「富」の生産をめざす社会であった。そのような人間を含めた自然の万物の共創の産物たる「富」を土台とする「経済」において、はじめて、人間の自己実現としての人間的完成——「勇敢人」の育成——が可能になり、かつまた、「経済」

と「自然」との統合としてある「富」の上に立つ、「人間」と「自然」が調和した社会が可能になると、ラスキンは考えたのである。

第4章 マルクスに於る「経済」と「自然」との統合 ——「自己実現」（「人間の人間化」）の論理——

1. 広狭二義の経済学

マルクスの経済学を構成する三つの基本的要素は、ラスキンの場合と全く同じく、「自然（『空気や処女地や自然の草木や野生の樹木』）」と「人間」と「生産物」である。マルクスの経済学にあってはそれらの諸要素のそれぞれは、ラスキンの経済学の場合と全く同様に、エコロジカルな「共創的相関関係」のもとにあり、それらはそれら相互の共働によって、それぞれに内在する「本質諸力（Wesenskräfte）」を「相互本質諸力」——それぞれに内在する「本質諸力（内面的富）」が融合・結合・合一したもの——として共創的に実現しあっていると考えられている。

たとえば「太陽」と「植物」との「共創的相関関係」である。「植物」は太陽エネルギーを自己の生命として発現し、逆に、「太陽」は「植物」の生命活動を媒介として自己を実現しているとして、マルクスは両者のエコロジカルな「共創的相関関係」について次のようにいっている。

「太陽は植物の対象であり、植物には不可欠の、植物の生命を保証する対象である。同様にまた植物は、太陽のもつ生命をよびます力の発現、太陽の对象的な本質力の発現として、太陽の対象なのである。」（参考文献 [3], P. 206 ~7）。

また「生産物（素材的富）」というのは「自然」と「人間」との「共創的相関関係」における「相互本質諸力」の実現——「自然」の「本質諸

力」と「人間」の「本質諸力」とが融合・結合・合一したもの——であるとして、「自然（土地）」と「人間」との「共創的相関関係」による「相互本質諸力の実現」ということについて、次のようにいっている。

「労働は、それによって生産される使用価値の、素材的富の、ただ一つの源泉なのではない。ウィリアム・ベティの言うように、労働は素材的富の父であり、土地はその母である。」（参考文献 [5], P.57～8）。

以下に詳論するように、マルクスにあっては、以上のような「共創的相関関係」のもとにある「自然」と「人間」と「生産物」という経済「主体」が共創的に「相互本質諸力」を実現しつつ、「経済的社会構成の発展」→「人間の人間化」をおしすすめていくものであるととらえられている。それだけではない。マルクスにあっては、さらに、「経済的社会構成の発展」→「人間の人間化」を押しすすめている「人間の歴史」は「自然（『大地』 + 『生命』）の歴史」から生成してきたもの、つまり、「自然の歴史」の一領域をなしているにとらえられている。

（人間の）「歴史そのものが自然の、人間への自然の生成の、現実的な一部である。」（参考文献 [3], P.143）。

以上のように、マルクスの経済学の特徴は「共創的相関関係」にある「自然」と「人間」と「生産物」という三つの経済主体が共創する、「人間の歴史（経済的社会構成の発展）」を「一つの自然史的過程」としてとらえているところに、つまり、「唯物弁証法」を「自然弁証法」からとらえているところにある。マルクスは眼前で展開されている「疎外された労働」にもとづく「経済的社会構成の発展」の背後に、「自然史的過程」が存在することを見抜いていたのだ。

「たとえ疎外された形態においてであれ、産業を通じて生成する自然は真の人間学的自然である。」(参考文献 [3], P.143)。

マルクスの経済学は、その経済学方法論にもとづいて、広狭二義の経済学——「広義の経済学」と「狭義の経済学」との統一——として構築されているということは周知の事実である。それはマルクスが眼前に展開されている「疎外と物象化の過程」(「人間の歴史過程としての資本主義社会」)の背後に「自然と人間との物質代謝の過程」(「自然史的過程」)が一如となって存在することを見抜き、その現実を理論的歴史的方法によって、正しく、経済学として構築したからに他ならない。

それ故、マルクスの経済学にあっては、「商品」は「価値」(「狭義の経済学」)と「使用価値」(「広義の経済学」)との統一として、「人間労働」は「抽象的人間労働」(「狭義の経済学」)と「具体的有用労働」(「広義の経済学」)との統一として、人間と自然との「物質代謝」の過程としての生産過程は「価値増殖過程」(「狭義の経済学」)と「労働過程」(「広義の経済学」)との統一としてとらえられているのである。

「狭義の経済学」というのは「生産手段の私的所有」にもとづく「生産の無政府性」という「資本制的生産社会」に固有の生産関係→「経済的社会構成」に関する学である。本稿はその問題を論ずるところではない。本稿が問題にするのは「狭義の経済学」の背後に存在する、「広義の経済学」の領域である⁽²⁷⁾。

そこには「地球生命系の経済学」⁽²⁸⁾としてのマルクスの経済学を根本から支える、「人間」と「自然」との「物質代謝」の論理が息づいている。

2. 「自然」と「人間」との「物質代謝」

——「地球生命系の経済学」の土台——

自然の万物は「共創的相関関係」のなかで「共生」し、相互にそれぞれの「本質諸力」を交流し合い、「相互本質諸力」を実現し合っている。マ

ルクスのいう「物質代謝」というキーワードには、このような事態が内在している。

たとえば、自然界に於ける「諸元素や化学的成分の消費が植物の生産」になっている、といった事態はその一例であり、すでに論じておいた、太陽と生態系および生態系内部のエネルギー代謝はその代表的事例である。

マルクスはそのような自然の万物にみられる「物質代謝」特に「人間」と「自然」との「共創的相関関係」に於るそれが、「経済」の土台をなしているとき、逆に、「生産」と「消費」という人間の基礎的「生命（経済活動）」から、「経済」の土台をなす、「物質代謝」を論じている。

まず最初に、「生産」という「生命（経済）活動」からみていこう。

「生産」とは、すでに1. で論じておいたように、「自然」と「人間」との「共創的相関関係」において、人間がその「本質諸力」（「自然力」・「生命力」・「人間能力」）を傾注して「自然」に働きかけ、それを改作し——「自然素材」の形態を変換させ——「自然」と「人間」との「相互本質諸力」の実現としての「生産物（内面の富の実現物）」を創り出すことを意味する。

マルクスは、かくのごとき人間の「生産物」の「生産」は、二重の意味で、「直接にまた消費でもある」、と論じている。第一に「生産」は、「主体的」には、人間の「本質諸力」（「自然力」、 「生命力」、 「人間能力」）の消費であり、第二にそれは、「客体的」には、「生産手段」（「労働対象」＋「労働手段」）の消費であると⁽²⁹⁾。

以上のごとき人間の「生命（経済）活動」に於る「生産的消費」という事態は、人間労働を媒介としての「自然」と「人間」との「物質代謝」が二重の形態でおこなわれていることを意味する。「生産」に於て「消費」される、人間と自然との「本質諸力」は、第一にその大部分が「相互本質諸力」の実現として「生産物（富）」のなかにはいりこみ、第二にその「一部分は、一般的な諸元素にふたたび分解され」、「自然」にもどる、という意味に於てである。

次に「消費」という人間の「生命（経済）活動」についてみてみよう。マルクスは、「生産」が同時に「消費」でもあるように、「消費」もまた同時に「生産」でもあるとして、次のように論じている。

「消費は直接にまた生産でもある。それは自然界で元素と化学成分の消費が植物の生産であるのと同じである。たとえば消費の一形態である食物の摂取によって、人間が彼自身の身体を生産することは明らかである。」（参考文献 [4], P.12）。

「物質的自然」（「諸元素」や「化学的諸成分」）の「消費」が「生命的自然」（「植物」）の「生産」につらなるのとちょうど同じように、「生命的自然」（「食物」）の「消費」が「人間」の「生産」につらなるというのである。ここにはエコロジカルな「共創的相関関係」下にある、「物質的自然」、**「生命的自然」**、「人間の自然」相互の、「生産物」を媒介としての、「物質・エネルギー代謝」が、つまり、マルクスの経済学をして「地球生命系の経済学」たらしめる土台が、鮮明に語られている。

さらに、この「消費即生産」という経済学的事態には、「人間」と「生産物」との、より意味深い連関が含まれている。

「消費と同一のこの生産は、第一の生産物の破壊から生じる第二の生産である。第一の生産では生産者が物となり、第二の生産では生産者によってつくられた物が人間となる。」（参考文献 [4], P.12～3）。

ここで「第一の生産」とは本来の「生産」のことであり、「第二の生産」とは本来の「消費」のことであるが、「経済学」に従えば、「第一の生産」（「生産」）で人間が自分を生産物と化し、「第二の生産」（「消費」）では、人間によってつくられた「生産物」が「人間」となってあらわれてくることになる、と両者のエコロジカルな連関をマルクスは看破しているのではあ

る。しかし、注意しなければならないのは、実は、この「人間」と「生産物」とのエコロジカルな「共創的相関関係」に、「生態系」から「文明系」への発展の、つまり、「人間の人間化」への契機が含まれているということである。

マルクスの経済学の土台をなす「人間」と「自然」との「物質代謝」——「生産即消費」, 「消費即生産」——の議論で見落してはならないのは、その議論が「人間の人間化（文明系）」への発展の契機を含んでいる、という点である。

それを示唆する一文を紹介しよう。

「生産は、消費のための外的な対象としての材料をつくりだす。消費は、生産のための内的な対象としての、目的としての欲望をつくりだす。」(参考文献 [4], P.15, ◦印は筆者による)。

「生産物」の「消費」は単に「人間」や「生命力」を生産するだけでなく、生産のために、「内的対象」として、「目的としての欲望」をつくり出すというのである。「人間」と「生産物」との「共創的相関関係」で、「生産物」の「消費によって創り出される」, 「目的としての欲望」こそ⁽³⁰⁾, 「人間の人間化」→「文明系の建設」を押しすすめる契機である。それ故、その内容をもう少し掘り下げて論じなければならない。

マルクスは「消費」というものが、「生産者の構想・計画を生産する」ということを、次のようにいっている。

「消費は新しい生産の欲望を創造し、こうして生産の前提である、生産の観念的な内部から推進する根拠を創造するから消費は生産の衝動を創造する。それはまた、生産では目的を規定するものとして作用するような対象をも創造する。だから、生産が消費の対象を外部から提供することが明らかであるとすれば、消費が生産の対象を、内的な像として、欲望として、衝動として、

目的として、観念的に措定することも同様に明らかである。消費は、なおま[・]だ[・]主[・]観[・]的[・]な[・]形[・]態[・]に[・]あ[・]る[・]生[・]産[・]の[・]対[・]象[・]を[・]創[・]造[・]す[・]る[・]」(参考文献 [4], P.13)。

「消費」は「生産の前提である、生産の観念的な内部から推進する根拠を創造する」。それは「生産の対象を、内的像として、欲望として」、「目的として」、観念的に措定する。つまり「消費」は生産の土台——「構想・計画」——を生産するとマルクスはいうのである。

「消費」について、何故このようなことがいえるのであろうか。それは、「生産」が「消費」の対象ばかりでなく「消費」の様式をも創造・生産する——つまり「生存」のための対象だけではなく、文明的な生活様式もまた創造・生産する——からである。

マルクスは以上論じてきた「生産（即消費）」と「消費（即生産）」とのうちつづく過程——「自然」と「人間」との「物質代謝」の過程——で、「人間の人間化」がおし進められていく論理を読みとっていたのである。次にその論理をさらに詳しく論ずることにしよう。

3. 「自然」と「人間」との「共創的相関関係」による「相互本質諸力」の実現 ——「人間の人間化」の論理——

イ、「人間化された自然」つまり「生産物」による人間性の変化

「人間は自然の一部」であり、他方、「自然」は「人間」の「非有機的な身体」である。このような両者の相関関係のなかで、「人間」と「自然」との「物質代謝」の過程が進行しているのであるが、人間はこの過程で、自分の外の「自然」に働きかけてそれを変化させ、そうすることによって、自分自身の内なる「自然」を変化させ、人間化をおしすすめている。マルクスはそのことを次のように表現した。

「人間は、この運動によって自分の外の自然に働きかけてそれを変化させ、そうすることによって同時に自分自身の自然〔天性〕を変化させる。彼は、

彼自身の自然のうちに眠っている潜勢力を発現させ、その諸力の営みを彼自身の統御に従わせる。」(参考文献 [5], P.312)。

人間労働による「自然」の改作が、何故、人間性——人間の「(内なる)自然」——を変化させ、人間の人間化をおしすすめることになるのか。それは人間労働によって「自然」が改作される時、そこには、人間自身の「(内なる)自然」のうちに眠っていた「潜勢力」——「本質諸力(内面の富)」——が発現し、「人間」と「自然」との「相互本質諸力」の実現としての「生産物」が生産され、そこに内在する「(相互)本質諸力」が人間の内面に働きかけるからである。「相互本質諸力(内面の富)」の実現としての「生産物」とは、別のいい方をすれば、人間の自己(本質諸力)が対象化された、「人間化された自然」、つまり、「人間」と「自然」との「相互本質諸力」の実現としての「生産物」であり、その「人間化された自然」に内在する「本質諸力」の影響によって、はじめて、「人間性」が変化し、「人間らしさ」が生成していくのである。

それでは「人間化された自然」によって「人間らしさ」が生成するというのはいかなる理由によってなのであろうか。

ロ、「五感」の形成

その理由は人間が「対象的存在」であるというところにある。

「対象的存在」というのは「対象」においてはじめて自己を確認することができる存在をいう。比喩的にいえば、「対象」とは自分の姿をうつし出す鏡であり、それ故、人間は鏡がなければ自己を確認することができず、鏡にうつし出される姿を感覚器関でとらえて自己を確認する、そういう存在だということである。それ故、感覚諸器官の態度こそが、人間的現実性の確証行為なのである。

さてここで「対象」というのは「人間化された自然(生産物)」をいう。「人間化された生産物(対象)」は「対照的存在」である人間の五感に働きかける。たとえば音楽という「人間化された生産物」がはじめて人間の音

樂的な感覺を呼びおこすように、「人間化された生産物」に内在する「相互本質諸力（内面の富）」が人間的感覺を呼びおこすのである。このように、「五感」の形成——音楽的な耳、形式美に対する目 etc の形成——は、人間的の本質諸力が対象化されてある「富（人間化された生産物）」をつうじて完成するのである。

「人間的の本質の对象的に展開された富を通じてはじめて、主体的な人間的感性の富が、音楽的な耳が、形態の美にたいする目が、要するに、人間的な享受をする能力のある諸感覺が、すなわち人間的の本質諸力として確証される諸感覺が、はじめて完成されたり、はじめて生みだされたりするのである。」（参考文献 [3], P.139 ~140）。

この論脈でマルクスはいっている。「五感の形成はいままでの全世界史の一つの労作である」と。

ハ、「意識している生命活動」

マルクスはさらにつづけていう。「人間は、ただ自然的存在であるばかりではなく、人間的な存在でもある」と。マルクスのいう「ただ単なる自然的存在」をこえる、人間の「人間的なもの」とは何か。

上の論理によって、人間の人間化の過程で形成された「五感」がそれであることはいうまでもない。しかし、マルクスはその上に、さらに、人間に固有の「人間的なもの」をみている。それは人間が自分の生命活動そのものを自分の意欲や意識の対象にしつつ——つまり、肉体的欲求から自由にしかも目的意識をもって——生命活動をおこなっている点、つまり、人間が「意識している生命活動」をおこなっている点である。

人間が他の動物と区別される、人間の人間たるゆえんの「意識している生命活動」ということの、詳しい内容について、マルクスは次のようにいっている。

「動物はただその属している種属の規準と欲求とにしたがって形づくるだけであるが、人間はそれぞれの種属の規準にしたがって生産することを知らされており、そしてどの場合にも、対象にその〔対象〕固有の規準をあてがうことを知っている。だから人間は、美の諸法則にしたがってもまた形づくるのである。」(参考文献 [3], P.96~7)。

「われわれは、ただ人間だけにそなわるものとしての形態にある労働を想定する。蜘蛛は、織匠の作業にも似た作業をするし、蜜蜂はその蟻房の構造によって多くの人間の建築師を赤面させる。しかし、もともと、最悪の建築師でさえ最良の蜜蜂にまざっているというのは、建築師は蟻房を蠟で築く前にすでに頭のなかで築いているからである。労働過程の終わりには、その始めにすでに労働者の心像のなかには存在していた、つまり観念的にはすでに存在していた結果が出てくるのである。労働者は、自然なものの形態変化をひき起こすだけではない。彼は、自然的なものの中に、同時に彼の目的を実現するのである。」(参考文献 [5], P.312)。

「人間」の「人間」たるゆえんは、直接的な欲求から自由に、「合目的な意志」に従って「合目的に活動または労働」することによって、「自然」のなかに自分の構想→目的(デザイン能力)を実現するところにある、とマルクスは論じているのである。「人間化された自然(生産物)」のなかには、人間的な「五感」のみならず、人間的な愛、精神的諸感覚(デザイン能力)、意志・意欲等が「相互本質諸力」として実現されているのだ。

それ故、「人間化された自然(生産物)」によって生成・育成されるのは「五感」だけではない。精神的諸感覚、実践的諸感覚、つまり、人間に固有の「人間的なもの」は、「人間化された自然(生産物)」によって、はじめて、生成・育成されるのだ。

「たんに五感だけではなく、いわゆる精神的諸感覚、実践的諸感覚(意志、

愛など)一言でいえば、人間の感覚、諸感覚の人間性は、感覚の対象の現存によって、人間化された自然によって、はじめて生成する。」(参考文献 [3], P.140)。

ニ、「人間」と「人間」との「共創的相関関係」に於る「人間の人間化」人間は分業・協業関係のもとで、しかも、「意識している生命活動」をもって、生産に励む類的存在である。この類的存在という人間相互の「共創的相関関係」下の生産活動によって、人間は相互に豊かにし合い、人間化されていく。ラスキン同様マルクスもまた、「人間の人間化」⇒人間的完成の究極は、人間相互の「共創的相関関係」に於る「共働」にあるとみているのだ。以下、その論理をみておこう。

(1) 人間(私)は自分の「本質諸力」(「個性」,「独自性」)を対象化しつつ、「生産物」を生産する。その生産物のなかには、自分の構想→目的(デザイン・意匠)もまた実現されている。

「労働者は、自然的なものの形能変化をひきおこすだけではない。彼は、自然的なもののうちに、同時に彼の目的を実現するのである。」(参考文献 [5], P.312)。

生産物のなかには人間の「自己(本質諸力・内面的富)」が、「構想→目的(デザイン・意匠)」が実現されている。

その意味で、生産物を生産する人間の行為は「自己実現」の行為である。そのかぎり人間(私)は生産活動に於て生命発現のよろこびを味わい、かつまた、自分の「本質諸力(目的)」が、その意味で自分の「人格性」が対象化されてある「生産物」によって、自己を確認し、豊かになる。

(2) さらに、ある人間(私)の生産物は、自分自身だけでなく、類としての他の人間(貴君)にも享受される。そのことは、その生産物に対象化

されてある私の「本質諸力」が貴君によって享受・受容されたことを意味する。類的存在である人間（私）の「本質諸力」が対象化されてある生産物が、これまた類的存在である他の人間（貴君）にも働きかけ、その人（貴君）の内面を豊かにするのである。

(3) その逆のこと、つまり、貴君の生産物を私が享受することによって私の「内面の富」が豊かにされるということも、当然おこりうる。ピカソの絵やモーツアルトの音楽によって我々の「内面の富」が豊かにされるということは日常よくあることである。

以上のように相互の「生産物」によって相互に豊かにされるということは、次のことを意味する。貴君と私とは、相互に、貴君にとって私は貴君と類との、私にとって貴君は私と類との「仲介者」となっているということ、そして、私が貴君自身の「本質（自己）」の補完物であり、貴君が私自身の「本質（自己）」の補完物となっているということこれである。別言すれば、生産物に対象化された類的存在としての貴君の「本質諸力」が私自身の不可欠の一部分になっているのとちょうど同じように、生産物に対象化された類的存在としての私自身の「本質諸力」が貴君自身の不可欠の一部分になっているということである。

貴君と私とは相互の「本質諸力」を、生産物を媒介として、相互に確認し合い、感じ合い、その相互の「本質諸力」の交流のなかで、類が共創した「類的能力」としての「相互本質諸力」を実現していくのだ。

(4) 以上のように、類的存在である私は生産活動という個人的な生命発現に於て私の類的な「本質諸力」を対象化し、私の「本質諸力」が対象化されてある「生産物」を媒介として、貴君の生命発現を創り出す。そのことによって私は私が「共同存在」であることを確認し、相互の類を実現する。

たとえば私のつくった芸術作品は芸術的センスと審美的能力とをもった公衆という類（貴君）を創り出す。私のつくった生産物はそこに対象化されてある私の「本質諸力」によって、他の多くの類の「本質諸力」に働き

かけ、その生命発現をつくり出していくのだ。

「消費が対象にたいして感じる欲望は、対象を認知することによって創造される。芸術の対象は——他のどんな生産物も同じであるが——、芸術に理解があり審美能力のある公衆を創造する。だから生産は、主体のために対象を生産するばかりでなく、対象のために主体をも生産する。」(参考文献 [4], P.14)。

こうして類的な「本質諸力」が対象化されてある「生産物」はそこに内在する類的な「本質諸力」の働きかけによって、「公衆」という主体、いわば、「類的共同人格」を生産するのである。

マルクスにあって「人間の人間化」は、このいわば「類的共同人格」の完成をまって、はじめて完成する。個を媒介としての、人間の類的自己実現の末に⁽³¹⁾。

以上を要約しよう。

人類の、類的自己実現としての「類的共同人格」の完成をおしすすめるのは、あくまで、自然の万物の、「自然」と「人間」の、「人間」と「人間」の「共創的相関関係」に於る人間的生産である。その生産が、(1)~(4)の論理によって、「生産物」を媒介として、「個的人格の相互補完」→「相互本質諸力（自然と人類が共創した類的能力）」の実現→「類的共同人格」の完成へとおしすすめていくのである。

「自然」と「人間」、「自己」と「他者」を二重に肯定しつつ⁽³²⁾。

4. 「経済」と「自然」との統合による人間の自己実現

マルクスがめざしたのは、「経済」と「自然」との統合の上に立つ、「生態系」に基礎を置く「文明系」社会、さらにいえば「人間と自然との本質的統一」としてある「社会システム」の実現であった。マルクスにあっては、以上で論じてきたように、その実現は「人間」と「自然」との「物質

代謝」の過程での、「自然」と「人間」と「生産物」とのエコロジカルな「共創的相関関係」に於て「相互本質諸力」を実現することによってはじめて可能であるとされている。何故ならそのような「共創的相関関係」においてはじめて人間の自然なあり方と自然の人間的なあり方が統一され、そこで実現される「相互本質諸力」は、それ故、「人間と自然との完成された本質統一」として現象するからだ。そして「人間と自然との完成された本質統一」に於て「経済」と「自然」が統合されるからだ。

マルクスは「自然」と「人間」と「生産物」との「共創的相関関係」に於る「人間の貫徹された自然主義」＝「自然の貫徹された人間主義」にもとづく社会の実現をめざしたのである。

「ここにはじめて人間の自然的なあり方が、彼の人間的なあり方となっており、自然が彼にとって人間となっているのである。それゆえ、社会は、人間と自然との完成された本質統一であり、自然の真の復活であり、人間の貫徹された自然主義であり、また自然の貫徹された人間主義である。」(参考文献 [3], P.133)。

それ故、そのような社会で可能になる、人間の真の復活は、同時に、自然の真の復活でもあり、かつまた、「自然」と「人間」との「共創的相関関係」に於る、自然を介しての人間の自己実現は、同時に、人間を介しての自然の自己実現でもあるのである。このように、マルクスにあっては、人間の自己実現としての人間的完成は「自然」と「人間」との「共創的相関関係」に於る「類的共同人格」の完成と共に、達成されるのである。

結び。「固有価値（ロマン派のエコロジー）」と 「本質諸力（科学的エコロジー）」との統合

我々の時代には、「持続可能な発展」という言葉に並んで、もうひとつの合い言葉がある。『「経済圏」から『生活圏』へ』という合い言葉がそれ

である。それらの合い言葉は「人間」と「自然（環境）」の汚染・破壊という時代的「悲劇」からの「自然（環境）」と「人間」の救済を志向するものだ。

我々の時代が志向する「開放定常系」としての「生活圏」の構築⁽³³⁾は「科学のエコロジー（エコロジー経済学）」と「ロマン派のエコロジー（環境保護思想）」との統合の上に立ってはじめて可能になる。両者の統合が時代的要請になる所以はそこにある。

「生活圏」の構築をめざしての両潮流の統合の試みは、我々の時代では、ラヴロック（参考文献 [23]）、ネス（参考文献 [14]）、マーチャント（参考文献 [18]）らさまざまな識者によってなされているが、実は、すでに、両潮流の源流をなすラスキンとマルクスによって、それぞれの側から、その原点をなすものが示されていた。

それでは「ロマン派のエコロジー（自然）」と「科学のエコロジー（経済）」との統合の原点をなすものとは、いったい何なのであろうか。

それを一言で表現すれば、人間を含めた「自然」の万物の「共創的相関関係」に於る「相互固有価値（ラスキン）」あるいは「相互本質諸力（マルクス）」の実現、ということだ。

本稿は「啓蒙」が究極にめざした、人間の自己実現としての人間的完成——自律的自立——ということに焦点をあてて、その原点をなすものを論じたものである。

さて、本稿の本論で論じておいたように、ラスキンの「固有価値」というキーワードは「自然」の万物には「目にはみえない力」——魂を高揚させ、美へ衝動する力——が内在しているということ直覚する、「ロマン派のエコロジー」に根を下ろすものであった。それに対し、マルクスの「本質諸力」というキーワードは、「自然」の万物に内在する「潜勢力」をラスキン同様みとめながら、そこにつきまとう「ロマンチックなもの」、「魔術的（神秘的）なもの」のいっさいを駆逐した、あくまで科学的なものとして措定されていた。ラスキンとマルクスとは、軌を一にして、「自

然」の万物に内在する「潜勢力」に注目し、その発揮と実現に「経済」と「自然」の統合の可能性を求めながら、その立場の相違から、反対方向を示すキーワードを使用しているのである。

ラスキンの「固有価値」というロマンチックな概念とマルクスの「本質諸力」という科学的な概念とは、どう折り合いをつけたらよいのか。最後にこの問題が残った。

人間を含めた「自然」の万物の「共創的相関関係」にある「生活圏」の構築を、ロマンティックに「有機的統一体」ということからアプローチしようと、あるいはまた、あくまで科学的に「宇宙船地球号」ということからアプローチしようと、問題は、「自然に内在する潜勢力」には、科学によっては証明されつくせない、「大いなる X」がつきまとっている、というところにある。それ故、一見したところ、我々には二つに一つの「方法」をとるより他に道は残されていないかのように思われる。

一つは、科学によっては証明されつくせないが、「自然」の万物には神秘的な「目にはみえない力」が内在し、それを統一している「根本の生命」が存在するという信仰のもとに、その信仰にもとづいて、幻想的なコスモスのなかで生きるか。他の一つは、今日科学によって証明されえない「不可思議」も、いつか科学によって証明されるという信仰のもとに、「不可思議」なものは「不可思議」なものとして保留しておいて、科学的に証明された真理のみを根拠としてカオスのなかで生きるか。

しかし我々にとって現在問題になるのは、そのどちらか一方をすて、どちらか一方をとる、という問題ではない。我々の時代の「悲劇」はそのような「信仰」の問題の埒外にあるのだ。

それ故我々は「大いなる X」の存在の存否から問題をたてるのではなく、ラスキンやマルクスにならって、人間を含めた「自然」の万物は「共創的相関関係」にあるという事実から問題をたて、「自然」や「人間」に内在する「大いなる力」——それがロマンチックなものであろうとなかろうと、また、科学的なものであろうとなかろうと、——をいかに共創的に

実現していくか、その事に専念するより他にない。

その限りで「啓蒙」が究極にめざした人間の完成——自律的自立——が可能になるのではあるまいか。

〈注〉

- (1) 小宮山康朗は「渋谷メインストリート現象」に現代文明の「悲劇」をみ、その元凶を「利潤と効用と成長とを至上目的として追求する経済」にありと論じている。参考文献 [12] を参照のこと。
- (2) 「環境（自然）保護」の立場から「環境倫理」を論ずるインテリジェンスは、この認識に於て一致している。たとえば参考文献 [16] の第一部を参照のこと。
- (3) 「学問」と「宗教」という両輪のもとにおしすすめられてきた、現世の「魔術からの解放」ということの意味と意義の詳論については、参考文献 [11] の第七章を参照のこと。
- (4) 「共創的相関関係」という、本稿の第1のキーワードをなす語は、「ホスピタリティ学」の基礎概念である。その詳細な内容については、参考文献 [15] の第8章を参照のこと。本稿では「天地宇宙」の万物が、なかんづく、「自然」と「人間」とが、相互関係、相互作用、相互補完のなかで、相互に新たな価値を共創していく関係という意味をこめて、「共創的相関関係」という語がつかわれている。
- (5) ルソーは「科学技術」による人間の「自然支配」→古典派経済学的富の増大を人間の非人間化の元凶とみなし、「人為」と「自然」との調和にある経済社会を構想している。詳しくは参考文献 [26] を参照のこと。この意味で、ルソーは「ロマン派のエコロジー」の源流であると共に、少なくともその「経済論」をみるかぎり、マルクスへつらなる、「科学的エコロジー」の源流にもなっている。なお、ルソーとマルクスの思想的類似については、参考文献 [26] のⅦを参照のこと。
- (6) ボドリンスキーからブハーリンに至る、「科学的エコロジー（エコロジー経済学）」の詳細な展開については、参考文献 [10] を参照のこと。
- (7) ルソーとラスキンとの、ロマン主義的な文明批判と、そこからの人間の救済の議論については参考文献 [28] を参照のこと。また、ルソーが「ロマン派のエコロジー」の原点に立つことは本稿第1章で示される。
- (8) モリスは、「科学的エコロジー（経済）」と「ロマン派のエコロジー（自然）」との、さらにいえば、「マルクスの思想」と「ラスキンの思想」との

統合を、その思想と実践に於て、最初に志向した人物である。参考文献 [19] には、モリスに於る「経済」と「自然」との、統合の原点が示されている。

- (9) ヨセミテ州立公園が設置される過程で、イエローストーン国立公園の誕生の下準備ができたのであるが、それを支えたのはエマソン、ソロー、ジョン・ミュアらの「自然保護」思想である。それは単に「自然」の美的な価値をみとめただけではない。その中心人物ミュアはすでに、ウィルグネスのエコロジカルな価値を認識していたのだ。以上のごとき「ロマン派のエコロジー」に支えられた「アメリカの国立公園の理念と政策」の詳細については参考文献 [21] を参照のこと。
- (10) 「人間中心主義」的なエコロジーを「シャローエコロジー」として批判するアルネ・ネスは、「ディープ・エコロジー」に内在しがちな、経済学への無関心をいましめ、生産と消費の上に立つ経済問題を考慮にいたした上で、究極目的としての自己実現をめざしている（参考文献 [14] を参照のこと）。また、「ラディカル エコロジー」のキャロリン・マーチャントは「マルクスとミュアとの出会い」という象徴的な言葉で、ソーシャル・エコロジーを論じている（参考文献 [18], 第6章を参照のこと）。ラヴロックの統合の試みについては、本論第1章で論ずる。以上のことは「経済（科学的エコロジー）」と「自然（ロマン派のエコロジー）」の統合は時代の急務であることを告げている。
- (11) 「相互人間価値」というのも、「ホスピタリティ学」の基礎概念である。参考文献 [15], 第8章を参照のこと。「相互人間価値」というのは、人間と人間との共創の産物であるが、筆者はさらにその概念を拡大し、自然の万物の「共創的相関関係」の下の、人間を含めた自然の万物の共働による、共創物に、「相互固有価値（ラスキン）」あるいは「相互本質諸力（マルクス）」という言葉をあてた。
- (12) 「生命の網の目」という「生きとし生ける者」の相互的な「共生」関係を、本稿では、「生命界」万物の「共創的相関関係」と表現している。
- (13) 以下の論述は、「エコロジスト」に通底する基本認識であるが、典型的な表現は、参考文献 [13] のIの2, 3で示されている。なお参考文献 [13] は、マルクスを源流とする「科学的エコロジー（エコロジー経済学）」の潮流を、正統に受け継いでいる。
- (14) これを本稿の言葉で表現すれば、人間を含めた自然界の万物の「共創的相関関係」ということになる。
- (15) 「ロマン派のエコロジー」の意味と意義の詳細については参考文献 [17]

を参照のこと。筆者教わるところ大であった。本稿のモチーフは同書にありといっても過言ではない。

- (16) A presence の訳語。「可視的な自然界に潜在する超越的存在」を意味するが、ワーズワースにあっては、それが必ずしも「造物主」に直結していない。あくまで自然界に内在している。その意味で、東洋的思想——「氣」、「仏性」、「本来の面目」——に近づいていると考えられる。ラスキンはそれを「固有価値」という言葉で継承した。
- (17) 「自然には絶対的価値がある。何故なら「自然と精神の相互作用は、意識と無意識の奥底に蓄積され、精神力として働くからだ」。ワーズワースはこの確信から「湖水地方」を「一種の国民的財産」にして保証すべしと提言した。ワーズワースの、この「湖水地方国民的財産化」というアイディアに讃同したのがラスキンである。……「ロマン派のエコロジー」の潮流をベースとしたイギリスにおける「国立公園思想」の形成と、そこに於る問題点については、参考文献 [22] を参照のこと。
- (18) ラスキンの「ブルジョア文化」批判の詳論については、参考文献 [28] の第一章IIおよび第二章IIを参照のこと。
- (19) 参考文献 [7], P.41~2を参照のこと。
- (20) 「皆さまは、まさにそんな人々の仕事、その力、その生命、その死のおかげで生きていながら、しかもかれらに感謝をなさることがない。皆さまの富も娯楽も誇りも、皆さまが軽蔑するか忘却しきっているこういう人々がいなくて、すべて存在しえないでしょう。」(参考文献 [6], P.212)。
- (21) 「われわれの『国民的』願望と目的は、ただ、娯楽を得ることだけです。……このような娯楽の必要が、のどを焼き、眼をうつろにする熱病のように、われわれをひつつかんで、無感覚・放縦・無慈悲にしているのです。」(参考文献 [6], P.213)。
- (22) 「彼がより多くの価値を創造すればするほど、それだけ彼はますます無価値なもの、ますますつまらぬものとなる。彼の生産物がよりいっそう良い恰好になればなるほど、それだけ労働者はますます不恰好になる。彼の対象がよりいっそう文明的になればなるほど、それだけ労働者はますます野蛮となる。労働が強力になればなるほど、それだけ労働者はますます無力となる。労働が知的となればなるほど、それだけ労働者はますます愚鈍となり、自然の奴隷となった」(参考文献 [3], P.90)。
- (23) ルソーのめざした「有徳人」とラスキンのめざした「勇敢人」とは、「良心」にもとづいて自律的に自立する、品位ある人格という点で類似する、ということについての詳論は参考文献 [28] の第三章を参照のこと。

- (24) 「それゆえに富というのは、『勇敢な人による価値あるものの所有』ということである。」(参考文献 [7], P.126)。
- (25) ラスキんに於る「生の増進」→「勇敢人の育成」の論理の詳論については、参考文献 [28] の第五章および結びの個所、および、参考文献 [29] の5. と6. を参照のこと。
- (26) 参考文献 [8], P.41~5を参照のこと。
- (27) 参考文献 [13] は、その副題に、「広義の経済学への道」とあるように、マルクスの「地球生命系の経済学」の側面を正しく継承している。
- (28) 筆者はマルクスの経済学は「人間・自然系としての生態系」と「人間・装置系としての文明系」との交流の上に成立しているから、その体系が、そっくりそのまま「地球生命系の経済学」になっているととらえ、そのことを詳論しておいた。参考文献 [25] を参照のこと。
- (29) 「生産は直接にまた消費でもある。主体的なまた客体的な二重の消費である。すなわち、生産することでその能力を展開する個人は、また、生産の行為でその能力を支出し使いへらすか、それは、自然的生殖が生命力の消費であるのとまったく同じである。第二に、生産手段の消費であり、生産手段は使用され消耗されて、一部分は（たとえば燃焼のばあいのように）一般的諸元素にふたたび分解される。同様に、それは原料の消費であり、原料はその自然の姿と性状とを維持しないでむしろ消尽されてしまう。だから生産行為自体は、そのすべての契機で、また消費行為でもある。だがこのことは、経済学者たちも認めている。消費と直接に同一のものとしての生産、生産と直接に一致するものとしての消費を、彼らは生産的消費と呼んでいる。」(参考文献 [4], P.12)。
- (30) 「マルクスの本来の見地は、自然と人間、物質と意識の弁証法的な統一的把握にほかならない」として、「欲望（内的な像、目的）」ということに焦点をあてて、マルクスの唯物史観→政治経済学をとらえかえそうとした試論——マルクスの欲望理論の全面的検討の序説——がある。参考文献 [20] を参照のこと。
- (31) 筆者はかつて、個を媒介としての、人間の類的自己実現の論理を、「歴史的事実主義としてのマルクス主義」ととらえ、そのことを詳論したことがある。参考文献 [24] を参照のこと。
- (32) 以上の、(1)から(4)の論述は、マルクスの次の文章に即して、論ぜられた。
- 「われわれが人間として生産したと仮定しよう。そうすれば、われわれはそれぞれ自己の生産において自己自身と他者とを二重に肯定したことに

なるだろう。私は(1)私の生産において私の個性とその独自性とを対象化したことになるだろう。したがって、私は、活動している間は個人的な生命発現の喜びをあげ、またそれと同時に、対象物を眺めては、私の人格性を対象的な、感性的に直視しうる、またそれゆえに疑問の余地のない力として知るといふ個人的な喜びをあげたことになるだろう。(2)私の生産物を貴君が享受したり使用したりするのを見て、私は直接につきのことを意識する喜びをあげたことになるだろう。すなわち私は、労働することによって人間的な欲求を充足するとともに、人間的な本質を対象化し、かくして他の人間的な存在の欲求にそれにふさわしい対象物を供給した、と意識する喜びを、(3)貴君にとって、私は貴君と類[Gattung]との仲介者となっており、したがって私が貴君自身の本質の補完物であり、貴君自身の不可欠の一部分であることが貴君自身によって知られ、かつ感じられており、だから私は貴君の思惟と愛とにおいて私自身を確証するすべを知っている、と意識する喜びを、(4)私は私の個人的な生命発現において直接に貴君の生命発現をつくりだし、したがって、私の個人的な活動の中で直接に私の真の本質を、私の人間的な本質を、つまり私が共同的存在であることを確証し、実現した、と意識する喜びを、直接にあげたことになるであろう。(参考文献 [2], P.117~8)。

- (33) 筆者はホスピタリティの観点から、「開放定常系」としての「生活圏」の構想と構造を、両潮流の関連で論じておいた。詳しくは参考文献 [27] を参照のこと。

《参考文献》

- [1] ルソー『エミール』、今野一雄訳、岩波文庫(中)
 [2] マルクス『経済学ノート』、杉原四郎・重田晃一訳、未来社
 [3] マルクス『経済学・哲学草稿』、城塚登・田中吉六訳、岩波文庫
 [4] マルクス『経済学批判要綱Ⅰ』、高木幸二郎監訳、大月書店
 [5] マルクス『資本論第一分冊』、国民文庫
 [6] ラスキンの『ごまとゆり』、木村正身訳、『中公バックス世界の名著52、ラスキン・モリス』、中央公論社
 [7] ラスキンの『この最後のものにも』、飯塚一郎訳、同上
 [8] ラスキンの『ムネラ・プルヴェリスー政治経済要義論一』、木村正身訳、関書院
 [9] ワーズワース『ワーズワース詩集—イギリス詩人選(3)—』、山内久明編、岩波文庫

- [10] ホワン・マルチネス＝アリエ (1999), 工藤秀明訳, 『エコロジー経済学・もうひとつの経済学の歴史』, 新評論
- [11] 石坂巖 (1984) 『知の定点』, 木鐸社
- [12] 小宮山康朗 (2003) 『『子供を消費者にする』社会を推進するのか? —『ホスピタリティ』アプローチへの注目—』, 「HOSPITALITY 第10号」
- [13] 玉野井芳郎 (1978) 『エコノミーとエコロジー—広義の経済学への道—』, みすず書房
- [14] アルネ・ネス (1997), 齊藤直輔, 開龍美訳, 『ディープ・エコロジーとは何か—エコロジー・共同体・ライフスタイル—』, 文化書房・博文社
- [15] 服部勝人 (2004) 『ホスピタリティ学原論』, 内外出版
- [16] シュレエダー＝フレチェット編 (1993), 京都生命倫理研究会訳, 『環境の倫理上・下』, 晃洋書房
- [17] ジョナサン・ベイト (2000), 小田友弥, 石幡直樹訳, 『ロマン派のエコロジー—ワーズワースと環境保護の伝統—』, 松柏社
- [18] キャロリン・マーチャント (2004), 川本隆史, 須藤自由児, 水谷広訳, 『ラディカルエコロジー』, 産業図書
- [19] 三浦永光 (1999) 「生活の美の再生を求めて—ウィリアム・モリスにおける芸術と社会」, 「津田塾大学紀要第31号」
- [20] 村串仁三郎 (1972, 73) 「マルクス欲望理論の問題点と研究視角—マルクス欲望論の研究其ノ一— (上), (下)」, 「経済志林第40巻4号, 41巻1号」
- [21] 村串仁三郎 (2001) 「アメリカ国立公園の理念と政策についての歴史的考察(1)—自然保護と観光その他の開発との確執の理解をめぐって—」, 「経済志林69巻2号」
- [22] 村串仁三郎 (2004, 5) 「イギリスにおける国立公園思想の形成 (1), (2) —自然・風景の保護とレジャー的利用の確執に関する考察—」, 「経済志林第72巻, 1, 2号, 4号」
- [23] J・E・ラヴロック (1984), 星川淳訳 『ガイアの科学・地球生命圏』, 工作舎
- [24] 飯岡秀夫 (1966) 「マルクスの哲学における人間の問題—歴史の実存主義としてのマルクス主義 (I) —」, 「三田経済学研究創刊号」
- [25] 飯岡秀夫 (1996) 「マルクスの経済学に於る『ヒト』, 『モノ』, 『地球・生命』 —『地球生命系の経済学』の基礎視角—」, 「高崎経済大学論集, 第39巻1号」
- [26] 飯岡秀夫 (2003) 『ルソーの「経済論」—「本然」と「逸脱」—』, 高文

堂出版社

- [27] 飯岡秀夫 (2004) 「エコロジーとホスピタリティー『開放定常系』としての『生活圏』の構想と構造―」, 「HOSPITALITY 第11号」
- [28] 飯岡秀夫 (2005) 「ルソーとラスキン―『文明社会』に於る『自然』と『人間』の救済―」, 「高崎経済大学論集, 47巻 4号」
- [29] 飯岡秀夫 (2005) 「ラスキンの『思想・経済学』とホスピタリティー『ホスピタリティー経済学』構築のために―」, 「HOSPITALITY 12号」

Ruskin and Marx
—Integration of “Scientific Ecology (Economy)” and
“Romantic Ecology (Nature)”—

Hideo HOKA

《Abstract》

Nowadays the modern civilization has turned into the stage of the tragic drama, a tragedy that ‘nature (environment)’ and ‘human beings’ have been polluted and destroyed.

The integration of ‘the scientific ecology: economy’ and ‘the romantic ecology: nature’ is urgent for relieving human beings and nature from such tragedy.

Ruskin and Marx tried to integrate economy and nature from their points of view, and have showed the direction how nature (environment) and human beings should be relieved from the tragedy of the modern civilization. The theme of this article is to search for the way how Ruskin and Marx treated the integration of economy and nature.